
HERO

放火真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HERO

【Nコード】

N9417P

【作者名】

放火真

【あらすじ】

地球外生命体の襲来まで時間が無い地球。

世界政府は、ある男の召還を要請した。

その男はかつて伝説とまで謳われたヒーロー。だが、そのヒーローはとある事件を境に世間から外れていた……

「俺はヒーローなんかじゃねえよ。このとおり、ただの清掃屋さ」
ビルの廊下を掃除していた中年の清掃員は、吐き捨てるようにそういった。

「でも——貴方は……」

僕の言葉を振り払うようにモップを片手にさっさと歩いていく清掃員。僕は追いかけることも出来ず、その背中を見送った。

あの哀愁に塗れた背中を、僕程度の人間が追って良いものか判断がつかなかったからだ。

着ていたスーツが、妙に暑苦しかった。

この世界にはヒーローがいる。

何代も続く、超人的な人々。

勧善懲悪で悪に対しては絶対無敵。

強気をくじき弱きを助ける正義の使者。

でも、彼らは誰にも理解されない。

一方的かつ秘密裏に、社会は強大な力を持つ彼らを抹殺してきた。そして、その代わりに新しいヒーローを用意してきた。

こうして、人々は何の疑いも無く、朽ちた古いヒーローを忘れ輝く新しいヒーローを迎え入れる。

それでも、忘れられない伝説のヒーローはいるんだ。
本当に絶対無敵で、優しい。正義の味方が。

燃え盛る炎の中、俺は老婆を抱えて火を噴く廃屋と化したマンションを脱出した。

俺を迎え入れる歓声と、老婆を迎え入れる家族の嬉々とした叫び。今も忘れちゃいけない、心地のいいものだった。誰もが救われた。誰も死ななかった。

その時の俺は、何でも出来ると思った。
思い上がっていた。

少々チープな話したが、地球には侵略者が襲来しようとしていた。今から2年前。

地球外攻性生命体が襲来するという可能性が発覚した。
そして、その日時がもう迫っているのである。

この事は日本・イギリス・アメリカ・中国その他数力国から成る世界政府の一握りの人間しか知らない。無用な混乱を避けるためだそう。無用な混乱なんて侵略に来てからいくらでも起こるだろうに。

そして、政府はある人物の召喚を望んだ。
かつて、この地球でヒーローと言われていた男たち。その中でも

伝説と謳われた男。

その人は単独でアメリカの一個大隊を壊滅させられるほどの超人、弱気を助けるまさにヒーロー。だれもが子供の頃に憧れ夢見る存在自体が理想の人物だ。

かく言う僕も、彼に憧れていた。

伝説の、ヒーローに。

「あの男なら、やってくれる」

そう僕の上司は言った、自信に満ちた顔で。世界を救ってくれると。

かくして僕は飛んだ、彼のいる場所へ。名も知らない町へ。

ある日、僕は誘拐された。僕の家はそこに有名な家だったから。

どこかの廃ビルに隠れて自分の事が放送されているのを見て、犯人は愉快そうに笑いながら言う。

「身代金をせしめたら、どっかの変態に売り払ってやるよ。坊や」怖かった。そのぬらりとした顔も、卑下な口も、気持ち悪い声も全部が嫌悪感と共に、恐怖感を運んでくる。ゴキブリみたいな感じだ。

僕は3日3晩をそのゴキブリみたいな犯人と震えて過ごした。最低限の食事を与えられ、生かされ続けた。

その4日目、この苦しさが続くなら、いつそ舌を噛み切って死んでしまおうかと考えたとき……

僕は見たんだ。空から降って来る本物のヒーローを。

僕は知ったんだ。ヒーローは空から飛んでくるんだって。

自動ドアを潜り抜けると、そこはただっ広いロビーだった。白いタイルに白い壁、異常なまでの清潔感が心の不安を駆り立てて、むしろ病気になるそうだ。

名も知らぬ町の、ひととき大きなビル。その1階のロビーには社員は居らず、たった一人だけ清掃員がいる。

「あの…」

僕はせつせとモップで床の白いタイルを磨く男に話しかけた。

「……………」

サングラスと無精ヒゲ以外に特筆するべきところが無い中年であるモップの動きを止めると、僕へと目を向けた。サングラスで目が見えない為、作業を中断させられた事に怒っているかも分からない。

「貴方が…」

僕は言葉に詰まった。

なんと、言えば良いのか解らない。感極まる…とはこういうことを言うのだろうか。

探していた英雄。

もう一度、この清掃員の体を見る。

中年にしては、長身瘦躯の素晴らしい肉体。サングラスと無精ヒゲのせいで少々柄が悪いが…間違いない。

僕はゆっくりと深呼吸をしてから再度口を開き、問うた。

「貴方が、ヒーローですか？」

僕の質問に彼は頭をかくと、また床を磨き始めた。

「……………」

僕の質問の回答は得られず、沈黙が流れる。

この場所は、ロビーのはずなのに周りには誰もいない。もしかしたら無人のロビーなのだろうか。ただ、男が一人せつせと床を磨いているだけだった。

僕は、その清掃員の中年を見つめやがてロビーの周りへと目を向

けた。

このビルの所有会社のロゴだろうか、見たことも無い会社名だ。何をしているのか皆目検討もつかない。

「なあ」

唐突に、無言だった男は作業を中断し僕へと声をかけた。

僕は無言で体だけを向けて反応を示す。

「ヒーローってのは、なんなんだい？」

「え？」

ひどく落ち着いた、落ち着きすぎた声で、彼は言った。

サングラス越しに表情は分からない、だが、僕が勝手に想像したその目は、とても悲しそうだった。

「世界を救うのがヒーローかい？」

そうだ、と口にでかかった。ヒーローは、みんなを救う特別な存在だ。

「勧善懲悪がヒーローかい？」

そうだ、とまた口にでかかった。ヒーローは、悪をくじき、善を守らなければならない。

「それじゃあ、ヒーローは負けちゃいけないのかい？逃げちゃいけないのかい？」

何も、言えなかった。ヒーローは、負けてはいけない、逃げてはいけない。それがヒーローであるならば。

そして、ここにいるのは……数年前のある日。逃げて姿をくらました、落ちぶれヒーローだ。

「分かっただろ？」

サングラスをはずすと、中年は言った。想像通り、悲しそうな表情をしている。

「俺はヒーローなんかじゃねえよ。このとおり、ただの清掃屋さ」

「ただの……清掃屋、か」

上が用意した宿に戻ると、僕はベッドに寝転がり天井を見つめた。染み一つない天井は、返って不安になる。あのビルの内装を思い出すからだろう。

中年のセリフが、頭の中で何度も再生される。

「……………」

ヒーローは、いつだって人々の理想だ。

ヒーローは、いつだって人々の守護者だ。

ヒーローは、いつだって孤独だ。

強き者として崇められれば崇められるほど、英雄は孤立していく。孤立すればするほど、社会から隔離される。

隔離されれば、いずれ、排斥される。

歴代のヒーローがそうだったように、彼もまた社会から抹殺されたのだろうか。

子どもには知らされない、ヒーローの実態。

一体何人の子どもが新しく登場したヒーローの中、朽ちたヒーローを見てくれたのだろうか……。

ああ、今日はもう眠ろう。そして明日もまた会いに行こう。

ほんの些細な事だった。

少し失敗してしまった。

力加減を間違えて、犯人を殺してしまったんだ。

それでも、みんなは祝福してくれると思っていた。

——俺はヒーローなんだから。

……でも、世間はひどい物だった。

俺はヒーローから一転、やり過ぎの人殺し。サディスト。鬼畜とまで言われた。

その時、初めて気付いたんだ。人々が俺に期待してたのは、犯罪者を殺すっていうような誰でもできる活躍じゃない。コメディみたいなよくできた英雄譚なんだ。誰も殺さず、丸く治める。自分ができないことを誰かがやってのけるのを見て、楽しむ。失敗なんて許さない。

俺は、絶望した。

俺が成りたかったのは、こんな道化師じゃない。俺が成りたかったのは、こんな見世物じゃない。

俺が成りたかったのは、皆を幸せにする事ができる、ヒーローだ。それから、俺は世間から姿を隠した。偽名まで使って身分を偽った。程なくして、次のヒーローが来た。俺よりも顔が良い奴だった。所詮顔か。

そして、俺は皆から忘れ去られた。伝説のヒーローなんて二つ名まで付けられた男の末路が、それだ。

床磨きももう何年続けているだろうか。最初は似合わなかった清掃屋の制服も似合うようになってきた。折った掃除用具は数百本に登るが、今の力加減は完璧だ。……あの時これくらいの力加減ができていれば、なんて事を思わないでもない。でも、結局後の祭りだ。ようやく馬鹿みたいに広いロビーの半分を磨き終えた。と、ここで、背後に立つ気配を感じ取った。

「……こんにちは。また、来ました」
昨日の兄ちゃんだった。

彼は、僕が挨拶をするとき心底うんざりした表情をつくった。

昨日の会話から推察したのだろう。無理も無い。だが、それはそれで手っ取り早い。

「来て、もらえますか？」

率直に用件を言うまでだ。

「……………」

やはりというか、反応が無い。そして昨日と同じく彼は床磨きを再開した。

ゴシゴシと、取れないシミを擦る。そこにシミなんて無いのに。

僕はロビーの脇にひっそりとある掃除箱からモップを取り出すと、水で洗って彼の横に並んで一緒に床を磨いた。

「そんなに落ちない汚れなら、僕も手伝いますよ」

「……………」

一瞬だけこちらに目を向けたが、僕を認知しないように彼は床磨きを続けた。

僕も、無言で彼の床磨きの手伝いをする。

そのまま、沈黙の時間が流れる……。

そして、時計が夕刻を指す頃。二人の床磨きは終了した。

僕は終了と同時に、周りと同じ白いベンチに腰掛けた。

「……………つ、疲れた」

予想以上の体力消費に体が呼吸と共に上下する。床磨きがここまでするものとは思わなかった。案外、やってみなければ分から

ないものだ。

そつと、横からペットボトルのお茶が差し出された。
元を辿って見ると、彼が差し出していた。

「ほれ」

そついうと彼は僕へそのお茶を投げた。

そして自分は缶コーヒーを片手に僕の横へドカリと座った。

「あ、有難うございます」

僕の言葉に、彼はぽりぽりと頬をかいた。

「労働者の当然の権利だ、気にするな」

そつ言つて彼は缶コーヒーを煽った。

「……………」

それから、また沈黙。

白い病的なまでに清潔な空間に二人の男が腰掛けて無言でお茶を
飲んでいる姿は少々異様だ。

「昔」

最初に口を開いたのは彼だった。

「自分をヒーローだと思つてた馬鹿がいた。そいつは、自分が何でもできる英雄だと思い込んでいたんだ。馬鹿なそいつは、自分は活躍を期待されていると思ひ込んでいた」

彼の重苦しい言葉の一片一片を大事に聞いていく。

「でも、実際は違つたんだ。ヒーローなんかじゃない、ただの道化だつたんだ。演技に失敗は許されない、徹頭徹尾完全にならなければならぬ道化だつたんだ」

そつ、それがヒーローの苦悩。自分は見世物なんだという恐ろしさ。

「ちゃんちゃらおかしいだろ？そいつは、皆を幸せにできるつて思ひ込んでたんだぜ。それだけ強いつて思ひ込んでたんだぜ？それなのに……………そいつときたら救つてきた奴らから裏切られたつてだけで、こんなにも弱くなつちまつた……………」

そつ、人はどこまでも情に厚く、どこまでも勝手だ。手のひらを

返すように裏切るなんてよくある事だ。

「それでさ……こんな所に隠れちまつてる。…こんな男、ヒーローなんかじゃねえ。お呼びじゃねえよ……わかっただろ？俺はヒーローなんかじゃない。俺は怪物にも勝てるし、隕石だってぶっ壊せるんだけど、どこまでも弱いんだ。何があつたかは知らないけど今代のヒーローがやってくれるさ。俺何ぞ、必要ない。」

そうだ。彼は最強で、どこまでも弱い……でも。

「貴方は、僕のヒーローだ」

「え？」

僕の言葉に、彼は目を丸くした。

「お久しぶりですね」

「え？」

僕の言葉に、彼は口を開けて呆けた顔をした。

「14年ぶりだ。ヒーローは空からやってくる」

「……え？」

14年前、誘拐された僕の元に現れたのは、彼だった。

ヒーローは空からやってきた。暇になった男がゲーム感覚で僕を殴っている最中だ。

顔を腫らした僕を見て、彼は静かに僕に言った。

「お前、何回殴られた？」

口の中が切れて痛かったけど、聞き取れるようになってなんとかいった。「そうか」

それから、彼は僕が殴られた分だけ、男を殴った。

そのうち、男は土下座をして彼に許しを乞うた。許してくれと、もうやめてくれと。

表情を変える事無く、彼は言った。

「お前さ、殴っておいてそれは無いだろ？この小僧が殴られた分だけ俺が殴る」

この人でなし、と男は叫んだ。

「お前がな」

それは、怒気を含んだ本当にすごい一撃だった。

ゴスツ

なんて重たい音と一緒に、男は地に伏したまま動かなくなった。それから彼は僕の縄を解くと、申し訳なさそうに僕に言った。

「悪いな、こんなところ見せちまって……お前見たらつい、カッとなつてさ……」

まるで子ども言い訳みたいだったが、それが面白くてつい僕は吹き出した。

「笑うんじゃねえよ」

それはさつきとは違う、本当に蚊も殺せない拳骨だった。

「貴方はヒーローです、昔も、今も」

僕は彼に言い放つ。

「道化だからなんですか。貴方は確かに救ったんだ。僕を。幸せにできたんだ。あの背中に憧れた日々を、貴方に救われたというこの誇らしさを、僕は否定されたくない。それが例え貴方自身にでも」

僕の過去に背負ったすべてを、今、この人に返す。大事なものを、大事な人へ。

「だから、貴方はヒーローだ。誰が否定しても僕だけは言い張り続ける。貴方は、間違いなくヒーローだ。僕は、そう信じている」

僕の言葉をすべて聴き終えると、彼は頭を抱えてうずくまった。そんな彼に、僕は名詞を差し出す。

「明日までに、復活する決心がついたら、ここに連絡をください。」

皆が、貴方を必要としています。救って欲しいと」

「……………」

それを彼は無言で受け取った。

「ありがとうございます」

そうして僕は病気になりそうなロビーから出た。暑苦しかったス
ーツが、妙に涼しくなっていた。

それから数時間後、僕の名詞に記載された番号の携帯に一本の着
信が入った。発信元は公衆電話だ。

僕は、携帯の通話ボタンを押す。

最初になんと言おうか？ そうだな……………最初は…

「おかえりなさい」

それから、小さな、ぶっきらぼうな声で聞こえる。

『ただいま…………』

地球が救われるかは分からない。でも、誰かに信じる心があれば
ヒーローは不滅だ。

誰か一人でも、見てくれる、認めてくれる人が居れば、ヒーロー
は死なない。

きっと、彼が負けることは無い。いや、絶対だ。

終

（後書き）

はじめまして、放火真と申します。
稚拙な文ですが、投稿しました。
批評など、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9417p/>

HERO

2011年2月5日00時23分発行